

VOLUME

69

N O V
1 9 9 9



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-Ken 422-8526 JAPAN

inside NEWS

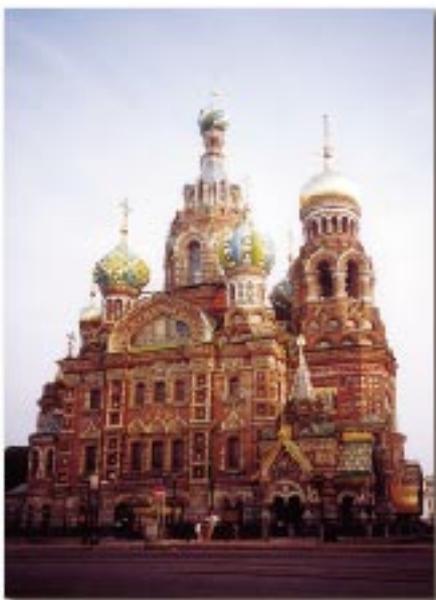


個人的ロシア論

～ロシア留学を終えて～

大学院国際関係学研究科 修士課程
国際関係学専攻2年
関 里葉矢

アムール川越しに、シベリアをのぞむ（ハバロフスクにて）



スパース・ア・クラビー聖堂（“血の救世主”聖堂）

本学と学術交流協定を締結しているモスクワ国立国際関係大学へ、平成11年度の短期交換留学生として派遣されていた国際関係学研究科の関里葉矢さんが帰国した。ロシア留学の感想を寄稿してもらった。

私は、本年度のモスクワ国立国際関係大学との交換留学生に選ばれ、1999年4月15日から10月15日まで、同校でロシア語を中心に勉強してきました。そして、勉強の合間をぬって、様々な名所・旧跡を訪れました。今回、このような文章の発表の機会をいただき、何を書こうか、非常に悩みましたが、モスクワでの生活や他都市への旅行などで得た体験を基に、非常に個人的なロシア論を書きたいと思います。

日本人がロシアを思い浮かべる時、おそらく赤の広場(モスクワ)にある聖ワシリー聖堂を初め

とするネギ坊主のロシア正教の教会があらわれることでしょう。モスクワ南東部のコロメンスコエやセルギエフ・パッサートのような白壁に青いネギ坊主もありますが、ほとんどが赤茶色のれんがに金色のネギ坊主です。そして、内部には壁に直接描かれたキリストやマリヤ、さらに十二使徒のフレスコ画やイコンを見ることができます。それらの周囲には金色の燭台などが飾られ、およそ「質素」とは遠く離れた華美な世界が教会の周囲には広がっています。(ただし、教会内は暗いので、一見するとそれ程華美には感じられません。)このような宗教的威容は、ロシア人の権威主義的傾向を十分に表していると思います。それを強く感じたのは、サンクト・ペテルブルクのスパース・ナ・クラビーという教会を訪れた時でした。周囲を圧倒する外観だけでなく、内部には隙間な

く描かれたフレスコ画があり、それらの鮮やかな色彩やキリストを中心とした構図は、人々の心の虚無や空白を埋める以上の心理的圧迫を感じました。また教会だけでなく、ソ連時代に建設された戦争犠牲者追悼碑や、地下鉄の構内の壁画や彫刻やシャンデリア、そしてエルミタージュを初めとする宮殿群にも、権威主義的傾向を強く感じました。その上、そのような建物群の周辺には、必ずといっていいほど物乞いがあり、彼等との対比がまたそのような思考を強化しました。余談ですが、若いロシア人女性が気が強く高飛車に感じられるのも、自身の容姿に絶対的自信を持ち、美しくあることが女性らしさとする権威主義的傾向があるからかもしれません。実際、彼女たちは美しいのですが...

ところで、皆さんは物乞いに出会った時、どのように対処しますか。(ちなみに、彼等はホームレスではありません。なぜなら、家がなければロシアでは冬を越せませんから。)私は、決してお金は渡しませんでした。なぜなら、彼等は社会や時代の犠牲者であるかもしれませんが、そのような人々は政府が救済すべきだと思うし、また、どんなに貧しくとも一生懸命働いている人は大勢いるのだから、物乞いという行為はそのような人達に対し失礼だと考えているからです。

モスクワ以外には、サンクト・ペテルブルクとハバロフスクを訪れましたが、先の2都市は当然としても、極東にもかかわらずハバロフスクは、非常にロシア的な町でした。ハバロフスク州に隣接するユダヤ人自治州にも足を伸ばしましたが、そこもロシア的な町でユダヤ人を連想させるものはシナゴーク(ユダヤ教の教会)だけでした。いずれの都市にも、レーニン広場を初めとして同名の広場や通りがあり、高層住宅群の合間や地下鉄周辺に市場が並んでおり、このような社会主義的な都市計画は、ロシア人の、住んでいる地域の気候などの特質によらない均質性を生んでいるのではないかと感じました。例えば、方言といった言葉の違いはほとんど感じられませんでした。(実際には、ある程度の差異はあるようです。)ある

本では、はるかに続く平野や白樺林などのロシアのあらゆるところで見られる風景が、ロシア人の均質性を生み出したと書いてありました。なるほど、シベリア鉄道に乗った際、モスクワ郊外でもハバロフスク郊外でも同じような風景が続いていたのを覚えています。このようなロシア人の特性は、日本人と比べると、どうでしょうか。似ている気もするし、全く異なる気もします。

以上、2点に絞って、非常に個人的なロシア論を展開してみました。賛否両論あると思いますが、ぜひ皆さんの考えも聞かせてください。

最後に、ロシア留学という非常に貴重な機会を与えてくださった島田、西山両先生と、モスクワ滞在中、公私両面にわたって、私を助けてくれたスレイマン・ジャブライロフ君に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

聖ワシリイ聖堂をホテル・ロシア側から



食品栄養科学部の動き

食品栄養科学部長 竹石柱一

食品栄養科学部は昭和62年4月に開設以来13年目を迎えましたが、その間、平成3年4月に大学院生活健康科学研究科の食品栄養科学専攻修士課程が、さらに平成7年4

月に同博士課程が新設されるなどの大きな変化がありました。そして、これまでに多くの教員の移動がありました。この3月には、当学部の創設に多大なご尽力をされたお二人、すなわち、初代学部長の星猛前学長及び前学部長の高瀬幸子教授が退官され、名誉教授の称号を授与されました。高瀬前学部長の後任として筆者(竹石)が選出され、4月に着任致しました。栄養生理学研究室担当の高瀬教授の後任としては合田敏尚助教授(4月に助手より昇任)が就任し、その助手として本学部1期生である駿河和仁氏が採用されました。食品製造工学研究室担当の中山勉助教授及び食品蛋白質工学研究室担当の酒井坦助教授がそれぞれ教授に、また、生物環境学研究室担当の板井隆彦講師が助教授に昇任されました。そして、空席となった生理学研究室と公衆衛生学研究室の助手として、それぞれ渡辺敏行氏と鈴木浩史氏が新たに着任しました。この結果、食品栄養科学部・専攻の教員数は、学部本務教員35名(教授12名、助教授6名、助手17名;このうち32名が研究科兼務)と、大学院生活健康科学研究科食品栄養科学専攻の大学院専任教員(学部兼務)8名(教授3名、助教授1名、助手4名)です(平成11年9月1日現在)。一方、当学部の学生数(平成11年4月現在)は、1年生から4年生まで合計238名で、そのうち男子学生は32名です。学部新設当初と比べ、男子学生数の著しい減少と内部学生の大学院進学率の低下が検討課題となっています。

食品栄養科学部が開設された後、上述の通り学部の上に大学院が新設されましたが、建物については現状のままで発足したため、現在各研究室の狭隘解消が当学部及び大学院食品栄養科学専攻の大きな課題となっています。

短期大学部浜松校は平成13年3月をもって閉校する予定になっていますが、それに伴って、助手1名を含む教員5名を当学部が受け入れるように県の大学室から要請があり、この教員移行に伴う諸問題について昨年度より検討を重ねてきました。その結果、短大部浜松校からの移行教員のための教員室と研究室、及び上述の食品栄養科学部・専攻の懸案事項である研究室の狭隘性をいっから解消できるスペースを含む建物が増設される予定になっています。現在基本設計の案ができた段階です。今後、短大部浜松校からの教員の移行に伴うカリキュラムの改訂作業も進められる予定です。

当学部の栄養学科は、厚生省から栄養士養成施設としての認可を受けていますので、現在は所定の単位を修めれば卒業と共に栄養士免許を取得でき、管理栄養士の国家試験受験資格が与えられます。しかし、厚生省は「21世紀の管理栄養士等のあり方検討会」の報告書(平成10年6月8日)に基づいて「栄養士法」の改正を現在進めており、その案によりますと、管理栄養士の国家試験受験資格が格段に厳しくなり、4年生大学の栄養士養成施設卒業の栄養士の場合、実務経験が1年以上必要になります。これまで通り、卒業後すぐ国家試験を受けられるためには、ぜひとも管理栄養士養成施設の認可を受けなければなりません。幸い、当学部栄養学科の場合教員増をせずに、比較的少ない予算措置のみで管理栄養士養成施設の認可申請の条件を満たすと思われます。当学部としては、上述の短大部教員の移行に伴うカリキュラムの改

訂に合わせて平成13年4月からの認可を強く希望しています。さらに、新栄養士法施行後の猶予期間は未だ不明ですが、もしそれが4年間の場合には、受験資格について現状を維持するためには是が非でも平成13年4月からの認可を得る必要があります。そのため「管理栄養士養成施設認可申請準備委員会」がこの4月に発足致しました。

すでに国立のいわゆる旧帝大系を中心とする大学において、大学院重点化が行われました。従って、今後大学院重点化の有無が大学の立場に大きな影響が出てくると予想されます。食品栄養科学

部及び生活健康科学研究科では、検討委員会を設置してこの問題に取り組んでいます。

この秋、平成11年11月18日から21日の4日間グランシップ(東静岡)で、「賢い食生活で健康長寿をめざす」というメインテーマのもとに、第4回静岡健康・長寿学術フォーラムが開催される予定になっています。食品栄養科学部の伊勢村護教授を実行委員長として、食品栄養科学部の教員数名を含めた実行委員により現在準備が進められています。ぜひ、多くの学生、教職員の方々が参加されますよう期待しております。

大学院国際関係学研究科の動き

大学院国際関係学研究科長 小浜裕久

去る3月、国際関係学研究科は第7期生を送り出すことが出来た。本研究科の知的訓練を乗り越えた修了生がこうして巣立っていく姿を見て安堵すると同時に、彼らが仕

上げた修士論文や社会での評価が、そのまま本研究科の盛衰を写す鏡だということを、我々教員は銘記しなければならないとも痛感する。本研究科が発足して以来、こうした思いは続いている。

国際化社会の進展にともない、高度な専門的知識と技術を身につけ様々な国際化社会で活躍できるスペシャリストの養成を図ること、そして、国際的視野に立った研究教育を行うことを理念として、本研究科は1991年に発足した。

その頃、国際社会は湾岸戦争や新たな民族紛争に直面し、冷戦後の新たな国際秩序を模索し始めていた。そして今日においても国際社会は試行錯誤しながら、核実験及び核ミサイル発射などの安全保障にかかわる問題から、金融不安など経済面

での動揺、環境破壊、テロ、人権侵害、難民、感染症等、多様化した困難な課題に取り組んでいる。本研究科はこうした世界の移り変わりに常に注目してきた。世界の一体化が進む現代の世界では、軍事力、経済力、文化の力など様々な要素が外交に影響を及ぼしており、そうであるからこそ、様々な力を背景に国際的な発言力を増していくことがますます重要になっている、と今年の外交青書では記されている。加えて、本研究科の教育においては、個人の研究や知的交流、知的営みの国際化が、一層、必要不可欠な資質となっていくものと考えている。

本研究科には、国際関係学専攻と比較文化専攻の2つの専攻が置かれている。教員と学生は、国際政治、国際経済はもとより、国際行動学、社会学、文化人類学、諸外国の文学・語学、地域研究など、国際関係の動向と直結する様々なディシプリンの学問を学び、研究している。分野が広範であるだけに、学生は授業を選択する段階で、学際的及び地域的な思考方法を身につけていくものと思う。一つの問題を、様々な切り口から考察し、

それぞれの分野の教員と学生達が真剣な議論を交わし、そしてまた考える。こういった知的訓練は学生が多角的、複眼的な視点を持つことができるようになるための、欠くことのできない重要な過程である。論文作成においても、教員と学生の間で、原稿の読み直しや書き直しの作業が幾度となく繰り返される。学生には、仕上げた修士論文等を寄稿できる身近な機会として、紀要の『国際関係学部紀要』と『ことばと文化』があるが、そこにたどり着くまでにも、当然、そうしたやり取りと審査が繰り返されるのだ。教員と学生の間で交わされる、こうした変わらぬ地味なやり取りを経て、学生は毎年巣立っていく。

さて、昨年も記したが、今の学生は勉強をしないという声には、果たしてそうだろうかという思

いがある。もちろん、疑問を感じる学生もいない。ただ、授業では結構厳しい課題を出し、議論でもあえて容赦ないコメントを言ったりしている。希望に満ちて入学してきた修士課程一年生の中には、多少面食らう者もいよう。しかしながら、それでもほとんどの学生が、そうした課題をきちんとこなし、一念発起して授業に、論文作成に取り組んでくる。実際、私はもとより、周辺の同僚に聞いても、私語で授業が進行しないと、課題をやってこないという話はほとんど聞かれな

い。もっとも、今の学生は勉強をしないと、授業中の私語の問題が俎上にのぼるにつけ、勉強することが楽しいと思わせるのも教師の役目ではないかと、自省をこめて心を新たにもしている。

短期交換留学生来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるフィリピン大学と、モスクワ国立国際関係大学から短期交換学生交流事業による派遣学生が10月初旬来日した。

フィリピン大学 社会科学・哲学学部言語学科4年生のアナ・リザ・サロモンさん (Ana Liza Salomon) は、国際関係学部で日本語や日本文化について授業を聴講する。

モスクワ国立国際関係大学 大学院国際関係学研究科修士課程2年生のセルゲイ・タルノフスキーさん (Serguei Tarnovski) は、国際関係学部、大学院国際関係学研究科で日本語、国際政治について授業を聴講する。

2人は平成12年3月末までの6ヶ月間、それぞれ清水市内のホストファミリー宅に、ホームステイしながら本学で勉強する。2人とも日本訪問は初めて。

短期交換留学制度による学生受け入れは今年度で3年目、今年度を含め計7人の学生を受け入れた。



フィリピン大学のアナ・リザ・サロモンさん



モスクワからのセルゲイ・タルノフスキーさん

小林豊子きもの学院奨学生授与式

小林豊子きもの学院奨学生の授与式が、9月20日に本学応接室で行われた。本奨学金制度は、静岡県立大学に在学する向学心に燃える女子学生に対し、学費の一部を援助することにより、国際社会文化に貢献するとともに、日本文化を伝承する若き人材育成の一助とすることを目的としている。

奨学金は月額30,000円、支給期間は1年間で返還義務はない。

「現代生活ときもの」をテーマにした論文審査に24人が応募し、生活健康科学研究科食品栄養科学専攻 修士課程1年生の矢澤 彩香さん、国際関係学部国際関係学科 3年生の王 岩さんの2人が採用された。

奨学生認定式には、小林豊子きもの学院より酒

井徳雄理事長以下関係者と、本学から廣部学長、多々良局長、木村学生部長他本学関係者が出席した。奨学金の授与を受けた留学生は、勉学に励み、日本の文化を学びこの奨学金を役立てたいとお礼のことばを述べた。



日産カーリース静岡奨学生授与式

日産カーリース静岡奨学生授与式が9月22日に本学で行われた。日産カーリースは日産自動車グループのリース、レンタル会社として静岡県下を中心に営業している。今年度初めて本学の学生に対して奨学金制度を創設した。奨学金は月額30,000円で、支給期間は1年、返還義務はない。

「レジャーと車の活用」をテーマにした論文審査に14名が応募し、生活健康科学研究科食品栄養科学専攻、修士課程1年 薛 景輝さんが採用された。

奨学生授与式には、和田 泰治日産カーリース静岡株式会社取締役社長他関係者と、廣部学長、多々良局長、木村学生部長他本学関係者が出席し

た。和田社長より今年度初めて奨学金制度を創設したが、本奨学金を勉学に生かし、国際交流にも役立ててほしいと挨拶があった。





ニューキャッスル大学教員来学

本 学と学術交流協定を締結している英国ニューキャッスル大学よりラインハルト・ドリフテ夫妻が10月6日日本学を訪問した。

ドリフテ教授はロンドンの国際戦略研究所副所長、オックスフォード大客員研究員などを勤め、現在はニューキャッスル大学の東アジア研究センターの所長。ドリフテ教授は国際関係学部で「EUと日本」と題した講演を行った。講演は国際関係学部の教員や多数の学生を対象に行われ、日本語で行われた興味深い内容に、学生から活発な質問が出されていた。またドリフテ夫人もイギリス文学の研究者であり、英語の授業の一環として、「ブロンテ姉妹の生涯」と題した講演を英語で行った。

10月7日には、ニューキャッスル大学よりジョン・ピール女史が来学。英語教育の方法等について本学教員と意見交換を行った。



静岡県立大学 第8回 薬学卒業教育講座
講演会

「臨床開発における薬剤師の役割」

静岡県立大学薬学部と静薬学友会は、平成9年の新薬事法・薬剤師法及び平成10年の第3次改正医療法の施行を踏まえ、薬学教育・研究の将来及び新たに生じた薬剤師の役割について、講演会を開催する。

開催日時	平成11年11月27日(土) 13:00～17:00
開催場所	静岡県立大学(看護棟13411教室) 〒422-8526 静岡市谷田52-1
参加費	2,000円(静薬学友会員は無料)
内容	プログラム 「特別講演・薬学教育・研究の将来」 静岡県立大学学長・日本薬学会会頭 廣部雅昭 「臨床治験制度の国際比較」 山之内製薬(株)創剤研究所所長 横濱重晴 「臨床開発と薬剤師」 東京医科歯科大学教授薬剤部長 安原真人
主催	静岡県立大学薬学部・静薬学友会
共催	(財)日本薬剤師研修センター
対象者	どなたでも参加できます。
申込方法	当日受付
問合せ先	〒422-8526 静岡市谷田52-1 静岡県立大学第8回薬学卒業教育講座運営委員会 TEL・FAX：054-264-5614(園部)

全国国公立大学選手権水泳競技大会で入賞

8月7日、8日に第46回全国国公立大学選手権水泳競技大会が神奈川県相模原市の市立総合水泳場で開催された。

この大会で本学の薬学部製薬学科4年生の岩井 雅恵さんが、女子100m背泳ぎの部で、第8位の成績を収めた。

本大会は、日本水泳連盟学生委員会が主催し、北は北海道大学から南は琉球大学まで、75校、男子337名、女子231名が参加して開催された。



静岡県陸上競技選手権で第6位

7月10日、11日に静岡県草薙陸上競技場で、第53回静岡県陸上競技選手権が開催された。

本選手権で、本学の経営情報学部経営情報学科3年生の磯田 進也さんが男子400mハードルで第6位の成績を収めた。

富士の高嶺

県立大学の特色のひとつに、『富士山が日本一綺麗に見える大学』ということがある。

だれもが、ここから見える富士に感激するが、その心は、昔も変わらなかったようで、万葉集にも素晴らしい歌がある。

『布土の嶺を、高みかしこみ、天雲の、い行きはばかり、たなびくものを』巻三の三二一番に載った高橋連虫麿(たかはしのむらじむしまろ)の作品である。うたは『ふじのねを、たかみかしこみ、あまぐもの、いいきはばかり、たなびくものを』とよむ。

富士山は空行く雲さえも、その高さにおそれいり、越えるのを遠慮して、横にたなびきひいていく... というのである。

富士を見る大学

虫麿は、藤原宇合(うまかい)に従い、任地常陸の国に行く途中、この歌を詠んだとみ

谷田風土記

られている。

おもしろいのは、富士という字は万葉集には使われておらず、布土・不二・不尽などと書かれていることだ。

いずれにしても富士は日本人にとり、永遠に心の山であって、県立大学は、『富士が見える地』でなく、『富士を見る地』であるとも言える。秋・冬の午前中のそれは、絶景であり、こうした風景のある大学に縁のあることは、なによりもの幸せではないだろうか。

国際関係学部教授 高木桂蔵



昭和62年4月2日 開学当日、大学から臨む富士山

61

受賞 1999年日本環境化学会表彰者

第6回環境化学論文賞

受賞論文 「空気清浄機から発生するオゾンとその室内濃度に与える要因」

- ・房家 正博 静岡県環境衛生科学研究所主幹
1999年3月本学にて博士号授与、本論文は主論文の一つとなっている。
- ・雨谷 敬史 本学 環境科学研究所助教授 大気環境研究室
- ・松下 秀鶴 本学 名誉教授
- ・相馬 光之 本学 環境科学研究所教授 水質・土壌環境研究室

研究助成の採択

平成11年度住友財団環境研究助成 平成11年10月14日決定

- ・竹元 万寿美 薬学部薬品製造化学教室 助手
「省エネ、省資源を志向した新規有機合成試薬の開発研究」

人事

採用

10月1日付け

- ・余 項科 国際関係学部 講師

ローマで行われた 第15回国際解剖学会に出席して

看護学部
木村忠直

第15回国際解剖学会と第4回国際Malpighi Symposiumがイタリアのローマで1999年9月11日から16日の6日間の日程でローマ大学医学部解剖学教室のPietro M. Motta教授、大会会長でありイタリア解剖学会の理事長のもとで開催された。11日の初日は午後の5時からopening ceremonyが開始された。大会会長や学会役員およびローマ大学関係者の挨拶があり、8時ころからconcertが始まり、続いてwelcome receptionが開かれた。12日からの学会はすべてローマ大学解剖学講座の講堂や階段教室、整備されている標本室兼講義室と一般の講義室で行われた。単に解剖学講座と言っても一学部に対応する規模の施設と内容を有している。この解剖学教室はトップのMotta教授のもとに各分野の助教授、講師、助手、技術員、秘書、事務員などが25 - 30人くらいのスタッフで構成されているとのことである。イタリアの解剖学は伝統がありローマ時代には著名なガレーノス(Galenos)が人体の構造と機能に力を注いだ。その後ルネッサンスの影響の下に他の科学と共に解剖学も発展し、15世紀には有名なレオナルド・ダ・ヴィチ(Leonardo da Vinci, 1454 - 1519)が人体を数理的に解析し750枚もの正確な解剖図譜をあらわしている。ちなみにローマ空港の正式名はレオナルド・ダ・ヴィンチ空港と言われ、ダ・ヴィンチの名称は今日でも健在である。次いで16世紀には近代解剖学の生みの親といわれるアンドレアス・ベザリウス(Andreas Vesalius, 1454 - 1564)が出た。その後の近世における解剖学においても専門分野では著名な研究者が多くでている。学会の会場になった教室にも研究者の功績を称える意味の教室名がありRoom AはR. Colombo、Room BはM. Malpighi、Room CはB. Eustachioなどイタリアでは有名な解剖学者である。今回の発表分野であるメインピックスとしては、細胞生物学、

臨床解剖学、比較解剖学、発生学、実験生物学、遺伝学、肉眼解剖学、人類学、細胞組織学、顕微鏡解剖学、分子生物学、病理解剖学、獣医解剖学、定量形態学、美術解剖学などがあり、器官系の分野では

骨髄と血液細胞、心臓血管系、消化器系、内分泌系、免疫系、リンパ系、運動器系、男性生殖器系、女性生殖器系、呼吸器系、泌尿器系、神経系、感覚器系があげられた。また研究技術分野では分析解剖学、電子顕微鏡学、組織化学、免疫組織化学、放射線学、新開発研究機器などがあげられた。12日からの実質的な学会は各専門分野に分類されシンポジウムが8時30分から午後1時までを5会場で以下の課題で行われた、Room A, モノアミン性神経と脳機能、Room B, リンパシステムと微細循環、Room C, 唾液腺の細胞形態、Room M, 1が体移動機構、2が脈管内皮細胞の病態生理。Intervalにおいて同じく他の会場では異なる演題のシンポジウムが行われRoom A, 骨格筋の筋線維型について、Room B, 免疫細胞組織化学の発展と組織化学、Room C, 細胞生物学の総合作用などが午後の2時30分から6時ないし7時ころまで盛んなdiscussionが行われた。13日も同じく午前8時30分より午後の1時までのシンポジウムとしてRoom A, 心臓分子の形態発生、Room B, アポトシスの細胞生物学における最近の知見、Room C, 腸管の新知見、Room M, 人体模型の作製、Room SP, 心血管系における研究の前進と呼吸科学。また午後2時30分から6時ないし7時までのシンポジウムとMalpighiシンポジウムでは以下の課題で行われた。Room A, 心臓分子の形態発生、Room B, 分子・細胞と生殖の発生生物学、Room C, 肝臓形態に関する最近の知見、Room M, 放射線解剖学と実体上の分割線、Room SP, 胎児の発生学。同じく14日も午前8時30分から午後1時までのシンポジウムとmalpighiシンポ

ジウムがあり、Room A, 細胞組織の超微細構造の新知見、Room B, 分子・細胞と発生生物学、Room C, 機能単位における中間細胞としての分子、Room M, 口腔システムその基礎と臨床、約1時間ほどの間隔を置いて午後2時30分からRoom A, 細胞組織の超微細構造における新知見、Room C, 骨、腱、靭帯に関するシンポジウム、Room SP, 生殖システムが午後の6時頃まで各Roomでシンポジウムのdiscussionが行われていた。この後の午後7時から10時すぎまではRoom SSでは129演題、Room Lでは78演題のPoster展示の発表が行われ、あちこちでdiscussionがはじまり二つの会場とも大盛況を呈した。翌15日も同じ時間帯で解剖学会のシンポジウムとMalpighiシンポジウムが行われ、Part5と6として細胞組織の超微細構造の新知見、分子・細胞と生殖の発生生物学、神経科学における新しい方向、講義内容と解剖学の履修科目、心臓脈管系、人類学、解剖学教育、ヒトの顎関節その基礎と臨床。最終日の16日も同じく午後8時30分から各Roomで分子・細胞と実験生物学、解剖学の歴史、胎児発生学、神経系統、臨床解剖学のシンポジウムがあり、同時に午後9時30分から午後の4時30分までのPoster展示発表がRoom SSで93演題とRoom Lで80演題の発表があった。筆者の発表は、このセクションでパネル番号Bの129で行った『FREQUENCIES OF MUSCLE FIBER TYPES IN THE HUMAN VOCAL MUSCLE : ヒトの声帯筋における筋線維型の頻度』内容を説明すると声帯筋は喉頭にある6種の筋のうち、甲状披裂筋に含まれている不随意筋であるが組織学的には横紋筋であり、神経支配は自律神経系の迷走神経から分岐する反回神経の支配を受けている点で上肢や下肢の筋のように、運動神経支配と異なっている。この横紋筋は緊張性収縮と持久力に富むタイプ の赤筋線維と速動性と瞬発力を発揮するタイプ の白筋維およびタイプ と の両形質を有しているタイプ の中間筋線維から構成されているので、この観点から男性15例(26歳から88歳)、女性12例(55歳から93歳)の声帯筋を運動機能に關与している下肢の前脛骨筋をサンプルとして単位面積あたりから算出した3タイプの筋線維と比較検討した結果、声帯筋は自律神経系の機能を反映し下肢の前脛骨筋より持続性に富む赤筋線維の頻度が最も高く男女の平均値で43.7%に対し前脛骨筋では35.8%、次いで白筋線維の声帯筋が

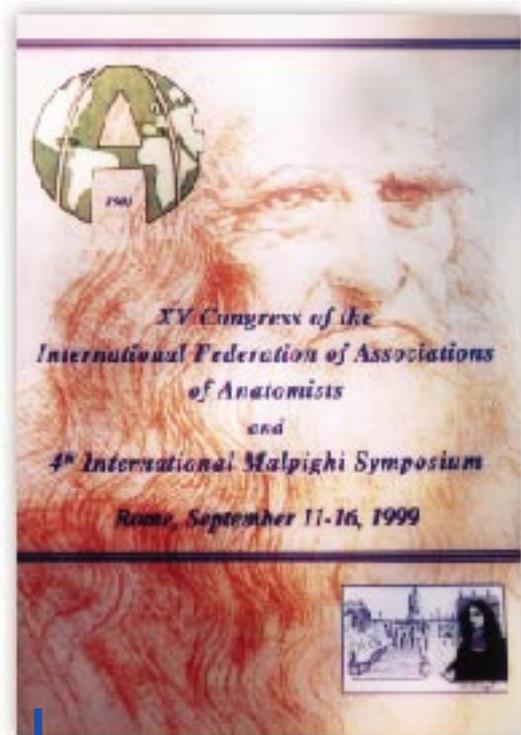
28.9%に対し前脛骨筋が37.2%を示した。また声帯筋の中間筋線維では27.6%で前脛骨筋も近似した27.0%前後を示し有意差がなかった。以上の筋線維型の頻度から声帯筋は持久性のタイプ 型の赤筋線維の傾向が強い横紋筋であることを明らかにした。日程を追ってシンポジウムとPoster展示の発表と各国の参加をみると、どの会場を見ても座長や発表者にはJapanとして日本からの参加者が多かった。Programおよび808頁もの大冊となったAbstractsから概観すると参加国が約50ヶ国で参加者の概数は日本が約200人、地元のイタリアからは約130人、アメリカが約64人、次いでドイツが約44人、フランス約40人、ルーマニア約36人、ブラジルとトルコが約34人、ポルトガル、ベネゼーラが約17人、イギリス、南アフリカ、スペイン、ロシアが約15人位などで、その他としては南米の諸国と北欧や東欧の諸国から1名から5ないし6人位の参加が多かった。発表者の英文要旨はイタリアの機能形態学の学術雑誌であるItalian Journal of Anatomy and Embryology (Volume 104-No1, 1999)にSupplementとして掲載された。これらの参加者数と発表の演題数および研究内容から見て日本の解剖学は世界のトップであることが考察された。次回の第16回国際解剖学会は日本が京都で開催することが本会議で内定した、日本は、これで2回目の開催である。日本での第1回目は今から24年前の昭和50年の8月25日から30日までの6日間で、第80回日本解剖学会と平行して第10回国際解剖学会が東京で開催、会場はホテル・ニューオータニで行われた。当時の筆者は若く解剖学教室の助手であった。それ以来、1989年の第13回国際解剖学会(ブラジルのリオデジャネイロ)と1994年の第14回国際解剖学会(ポルトガルのリスボン)、今回のローマでの学会で4回目の参加である。ローマでの本学会は午前8時30分から夜の10時すぎまで強行であったが、主催者側は各国からきた人々のために午前中のみ半日の市内観光バスツアーを2回(12日と14日)と晩餐会の行事として13日に音楽会があった。14日の夜8時からRoman Nightと題して学会会場の庭でカンツオーネとパーティーが開かれた。また15日には夜の8時30分から市内の会館で学会祭と称して食事会が行われた。筆者が宿泊したホテルはローマに入ってくるすべての国際列車の終着駅であるテルミニ駅から歩いて7-8分位の場所にあった。駅前に広がる

バスターミナルから、テルミニ駅を見た瞬間に屋根の曲線と支柱の構築から何となく動物の背柱形態に類似している感じを受けた。数日後にテルミニ駅周辺の観光案内をよんでいるとテルミニ駅は、その外観から地元では『ディノザウロ』という恐竜の愛称で親しまれているとされており筆者の解剖学的な見方が当たっていたことで自己満足した次第である。さすがはミケランジェロが出た美術の国柄であり、駅を建築するのにも深い芸術的な配慮が託されていることを知った。この駅からローマ大学医学部の学会場には地下鉄で3つ目のポリクリニコ (Policlinico) 駅で下車して約5分くらいの所にあり交通の便がよかった。この駅名のPoliclinicoと言うのは語源からみて臨床の各診療科をそろえた大病院という意味であり、駅から学会場までの道路の両サイドは、ほとんどローマ大学医学部の附属の病院通りであった。こうして6日間通った学会も無事に終了した。参加者の多くはイタリア北部のフィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノなどの観光地に旅立って行った。筆者等の7人のグループはプライベートの旅として学会終了日の午後6時30分の飛行機でローマからイタリア半島の先端に位置し、地中海で最大の島であるシチリア島の首都であるパレルモに向かった。このシチリア島は日本の九州より小さく、四国より大きな島で気候は亜熱帯性である。アメリカマフィアの故郷として有名であるが、この島は文化の交差点とも言われ、古代より各種民族の興亡が繰り返され文化人類学的に特異的な地域である。

ギリシャ文化、アラビア文化、アフリカ文化、更には北欧のバイキングの軍団が南下しながら大マグロを追ってジブラルタル海峡から地中海に入り、この島に定着したとあり漁師の古老には今日でも自分はバイキングの子孫であることを誇りとしているとのことである。古来より、これらの交じり合った文化の遺跡が島の各所に点在しているので、これらの文化遺跡を見学する目的でシチリア島に渡った次第である。日程と時間的な余裕がなかったので、パレルモで一泊して翌朝の17日は5時に起床し5時30分には車で約60Kmの山中にあるセジェスタの遺跡に向かった。この遺跡は深い谷に臨む巨大な神殿で紀元前5世紀ころのものと言われ、未完成のまままで今日に至っているとのことである。隔絶された山中にあったため侵略者による破壊を免れたことから保存状態が極め

て良いとのことである。次いで山中から海岸線に向かって約50kmを移動してセリヌンテの遺跡に向かった。

ここは海岸に沿った遺跡で古代のアクアポリス(都市国家)の痕跡を残した景観であり、神殿や野外劇場の石材が山積していた。この地区は葡萄の産地であることから良いワインが多く生産されている所であった。我々は更に海岸線に沿って約60Kmを走行し、シチリア島に残るギリシャの遺跡で最も重要な文化財であるといわれているアグリジェントの遺跡に辿りついた。ここは山頂にそったアグリジェントの町から海岸に向かって急傾斜になっており、紀元前6世紀ころの神殿の谷やヘラクレスの神殿、コンコルディアの神殿、ジュピターの神殿などがある。古代から今日まで立ち続けてきた廃虚の列柱を見て古の活況を感じた。これらの遺跡から出土した品を収集した考古学博物館があったが、時間の関係で観覧や閲覧ができなかったことは、地中海までやってきたのに誠に残念であった。それから宿泊地であるタオルミナに向かって島の内陸を山の谷間や農村地帯、小さな町、大きな町を走行しているうちに車の左側に特に大きな山と山麓が雲間に遠望された。これはヨーロッパで最大の活火山として有名なエトナ山であった(このエトナ山は



レオナルド・ダ・ヴィンチの顔を配した学会の看板

